プロ野球に学ぶ、勝つ組織に必要な人材（第1回）

1985年の阪神に何が起こったか？川藤幸三の機能

2016.02.15

阪神タイガースは1964年にセ・リーグ優勝を果たして以降、52年間でわずか3度（1985年、2003年、2005年）しかリーグ優勝していない。低迷することが多かった球団が3度の優勝を果たしたときには、一体どのようなチーム状態だったのだろうか。どのような人材管理がなされていたのだろうか。阪神における過去3度の優勝から、組織が勝つために必要なものが何かを探る。

ホームランで圧倒した1985年。四番打者をそろえれば勝てるのか？

阪神の長い歴史の中で、最も低迷していた時期は1977年から2002年の26年間である。この間Aクラス（セ・リーグ6チーム中3位以上）に入ったのはたったの5回、Bクラス（4位以下）になった率が8割を超える弱小チームとなっていた。

しかし1985年に、たった一度だけリーグ優勝を果たし、球団初の日本一に輝いている。真弓明信選手、ランディ・バース選手、掛布雅之選手、岡田彰布選手の4人が30本塁以上を打ち、チームの本塁打数は200本を超えた（219本）。点を取られても取り返す逆転劇を幾度となく繰り広げ、21年ぶりの優勝を果たしたのだ。

優勝できた直接的要因の一つは、“強力打線”であるのは明白だ。しかし、ホームランバッターを何人もそろえたからといって、優勝できるものではない。代表的な例は1997年の巨人だ。当時の巨人はもともと松井秀喜選手、広沢克己選手（元ヤクルト4番）というホームランバッターを抱えていたが、この年はさらに清原和博選手（元西武4番）、石井浩郎選手（元近鉄4番）を獲得。しかし、ペナントレースは4位に終わった。

チームが優勝するためには、選手たちがシーズンを通じてチーム一丸となり、活躍し続けなければならない。勝つために必要なこと、それがチーム一丸となる組織マネジメントである。確かに、1985年には素晴らしい選手がそろっていた。しかし、1985年以外の阪神にも、素晴らしい選手は大勢いた。にもかかわらず、優勝できなかった。1985年と、その他の年の違いはどこにあるのだろうか。

小林の言葉で突き動かされたのは掛布だけではなかった… 続きを読む